

## 納西族地区における馬幫活動の考察

上野 稔弘<sup>※</sup>

### はじめに

雲南においては、かつて馬を使った隊商活動、すなわち「馬幫」による交易経済が盛んに行われていた。むろん今日では道路網の整備に伴って陸上交通が発達しており、かつての馬幫交易は近代的輸送手段にとって替われ、往事の隆盛をうかがうことはできない。今回の雲南省麗江納西族自治县における民俗調査で聞き取り調査を行った八か村のうち、白沙郷龍泉村は明代より解放以前まで商業が盛んに行われたところであり、麗江地区における皮匠（皮革工）及び馬幫出身地として知られる。この龍泉村ではかつて皮匠であった村人等から聞き取りを行い、その結果近代、特に民国期の麗江納西族地区の馬幫の実態をある程度知ることができた。本報告ではこの調査資料をもとに、麗江納西族地区の馬幫活動およびそれに関連する民俗を整理し、いくつかの分析を行いたい。

### 一、雲南における馬幫活動の位置

雲南における馬幫活動は歴史的に見てどのように発展し、またそれは地理的に見てどのような特色があるのだろうか。以下に地理的条件と歴史的条件の双方について整理してみた。

#### (1) 地理的条件

雲南省は中国最奥の山間部に位置し、とりわけ西部はヒマラヤ山脈に連なる高山と東南アジア方面へ向けて南流する河川の作り出す渓谷によって険しい地形を形成している。こうした地形の所々には「壩子」と呼ばれる小盆地が開け、比較的温暖な気候の下で農耕社会が形成されている。こうした壩子間の農作物や副業生産物の交換から交易が始まり、次第に拡大してゆく過程で、大量に物品を輸送する手段として馬が重視され、こうした山越えの商業活動において馬幫が発達してきた。したがって雲南及び近隣各省区において、様々な民族がそれぞれの需要から独自の馬幫活動を展開していたのである。特に高地遊牧民であるチベット族は内地との様々な交易活動を重視したため、馬幫の役割も特に大きかったと考えられる。

納西族の馬幫活動などのような点で特徴づけられるのであろうか。麗江を中心とする納西族居住区一帯は、東部は漢族、北部はチベット族、南部は白族の勢力圏に接しており、これら三大経済勢力圏の交錯地であった。このことは麗江納西族地区が独立した経済圏を形成する上での大きな障害であるが、このことは裏を返すと納西族にとって極めて有利な経済条件を提供していた。すなわち、「長い歴史の中で、内地から来た商人は安全条件・言語・気候・風俗習慣等が適応し

---

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

ないため、麗江までしか来なかった。同様に、カム、チベットの商人も麗江から先へは行かなかったが、その原因は内地のことが余りよく判らなかったからである。一方麗江は両地区と接し、辺界を連ねており、気候・言語・風土事情・生活習慣などに基本的に通じており、チベットと内地の経済交流の仲介作用をもたらした」のである<sup>(1)</sup>。このため麗江一帯は各民族の中継貿易の拠点となり、納西族の馬幫は諸民族間の交易を仲立ちする役割を持つことができたわけである。

## (2) 歴史的條件

雲南における馬幫活動はかなり古く、秦・漢の時代にはすでに「西南シルクロード」が存在していたとも言われている。魏晉南北朝の争乱期には中原の統治の弱体化とともに交易活動も低調であったが、隋唐の時代、南詔国及び大理国の庇護下で雲南と中原王朝との交易が回復し、またチベットの吐蕃王朝との間では「茶馬貿易」も行われるようになった。当時、この馬幫の交易ルートは四方にのび、東は中原、西はビルマ、北はチベット、南は思茅一帯の茶葉生産地を経由して東南アジアへと伸びていた。明清時代には商業の発展に伴い、馬幫活動もますます拡大していったのである。

納西族の馬幫活動がいつ頃始まったかについては、納西族自身の形成の問題もあり、はっきりしない。和志武氏の主張では『華陽国志』等の記載から、三国時代には納西族の祖先が蜀と交易を行っていたとする。いずれにしろ、麗江は大理からチベットへのルート上にあり、チベットを主たる交易相手としていたことは確かであろう。『東巴経』には「聡本（チベット商人）の馬幫の九兄弟が、九十九匹の駄馬を連れて来た」という記述があり、麗江とチベットとの経済的結び付きの強さをうかがわせる。さらに、清朝初めの順治十八年には納西族地区とチベットの間の「茶馬貿易」が正式に始まり、一層の発展を見せた。

こうして次第に発達してきた納西族の馬幫活動が飛躍的に拡大したのが中華民国期である。西洋列強の進出による商品経済の流入は雲南省にも及び、フランスとイギリスは雲南の豊富な地下資源を求めてインドシナ及びビルマ方面から勢力を拡大していった。とりわけ1930年代には、日中戦争が勃発し、沿海地方が日本軍に占領されて海上貿易が停止し、国民政府が四川省重慶に移転すると、雲南・ビルマ方面からの物資援助が注目され、「援蔣ルート」と呼ばれるビルマから保山・大理・昆明を経て四川・貴州・広西につながる道路が整備された。ところが日本軍の戦略は中国西南の物流に大きな変化をもたらした。「一九四二年にビルマが陥落し、国際ルートではインドーラサのルートのみが物資を運輸できた。かつてビルマにいた大商人はそれぞれインドへ物品を送り、カリンボンでチベット族の馬方にラサまで運ばせ、さらにラサから馬を換えて徳欽・麗江へ運ばせたが、毎年一回しか運ばず、荷が多いのに馬が少なく、運輸面での問題を解決できなかったので、インドで商売をしていた商人は、麗江で馬方を雇って馬幫を組織し、チベット族に経営させた」<sup>(2)</sup>。こうして麗江は国際交易の一大拠点となり、各地の馬幫が支店を置く中で、納西族の馬幫活動もまた空前の活況を呈することとなったのである。

## 二、皮匠と馬幫

東河行政村龍泉自然村は馬幫とともに皮匠で有名な村である。具体的数値を示すと、1956年の農業集団化により農村での商業活動が制限される以前の、龍泉行政村管轄区内の自然村における皮匠の割合は、仁里自然村が80%以上、中和自然村が15%、街尾自然村が20%、文明自然村は5%、松元村は50%以上である。また松元村の中でも慶雲地区は90%、松元地区は50%という高さである。このことから龍泉村は農業より商業で栄えていたことが判る。この村で皮革製品の生産が盛んになった原因として、村人はそれが「一つの針、一つの皮」で始められる商売だからだという。すなわち材料となる皮さえ手に入れば簡単な道具でどこでもできる、元手のかからない商売なのである。

これら皮匠は麗江で活動していただけでなく、全国各地へ出稼ぎに行った。それは現地のことわざに「カラスのいるところには東河の人がいる」とあるほどに活発であった。彼らはまず一人で仕事を始め、それが軌道に乗ると一度帰郷し、今度は家族を連れてそこに定住した。とりわけ北部の遊牧民族地区は革製品の需要が高いため、こうした出稼ぎが多かった。しかも彼ら龍泉村出身者は団結力が強く、どこで仕事を始めるにしても同郷人が援助してくれたのである。

皮革売買や革靴製造で儲けた者はさらに馬を購入し、馬幫を開業して貿易に従事した。彼らは中甸を経由してチベット、ネパール、インドに行き、茶・馬・衣類などを扱った。交易相手は主にチベット、西康方面であり、そのため彼らはチベット人相手の商人＝「藏客」と呼ばれた。村人の話では、龍泉村で最初にこうした仕事を始めたのは楊凱という人で、彼はその後役人となって郷里に大邸宅を構えた。彼は今日の麗江の中心である大研鎮の商人よりも裕福で、大研鎮の商人がわざわざ彼を訪ねにいったという。しかし彼の邸宅は1870年代の杜文秀の回民蜂起において攻撃的となり、全て灰燼に帰したという。

楊凱氏の活躍した時代を考えると、龍泉村の馬幫は歴史が意外に浅いことが判る。村人の話では、龍泉村はかつては一農村にすぎなかったが、清朝の道光年間（1840）頃を境に急速に皮匠・馬幫の村へと変化したのだという。その転換には特に大きな契機があったわけではないが、楊凱氏のような創始者が成功を収めた後、そこに親類を巻き込む形で次第に広まったのだという。兄弟やいとこが馬幫に入って働き、仕事のコツをつかんだ後に独立するのである。彼らは「藏客」としてひとたび成功すると裕福になるが、その基盤は不安定なものであり、匪賊の襲撃を受けて積み荷を奪われたり、商売で失敗したりするとたちまち没落してしまうのである。

村人が語った祖父の話は、こうした納西族馬幫の活躍がいかに活発であったかを知るのに充分であろう。その人は十三歳の時から四年間チベット族の馬幫について商売を学ぼうとした。彼はまだ年少であったため、便器掃除などの雑役ばかりをまかせられた。しかし彼はそれを立派に勤め上げたため、馬幫の主人は感心し、彼に金銭を渡して西康省の康定にやって商売に従事させることにした。この頃、青海省の馬英超が西康を訪れており、その際に愛用の靴を壊してしまい、各地で同じものを探させたが、見つからなかった。そこで彼が故郷で習得していた技術で同じ靴を作ったところ、馬氏は非常に喜び、彼にいくらかの金銭と24頭の馬を与え、チベットに赴かせ

た。しかし馬幫の扱いにまだ慣れていなかった彼は商売に失敗し、しかたなく再び西康に戻って馬に事情を説明した。馬氏は彼が逃亡せずに戻ってきたことに感心し、再び彼に34頭の馬を与えた。今度は彼も成功し、西康でも著名な「藏客」となった。彼はチベット族の妻を娶り、ラサに居を構えた。彼はその後四回にわたりインドに赴き麝香貿易を行うが、偽物をつかまされて失敗した。彼の家はこれを契機に没落し、息子夫婦は麗江に戻ったということである。

### 三、民国期における馬幫交易の実態

聞き取り調査では、かつての馬幫交易の実態に関する幾つかの知見を得ることができた。以下においてそれを整理してみよう。

#### (1) 交易経路

麗江納西族の馬幫交易のうち、龍泉村出身者のものはその交易経路として、「江邊古宗」（現在の迪慶チベット族自治州）を経由してラサ方面へ延びるものと、東部方面から金沙江を渡り旧西康省（現在の四川省阿坝・甘孜両チベット族自治州、凉山彝族自治州及びチベット自治区チャムド地区東部に相当）から青海省へと至るものがあり、このことから主としてチベット族を交易相手としていたことが判る。目的地到着前での所要日数を見てみると、麗江から中甸までが7日、麗江から徳欽までが18日、麗江からラサまでが3ヵ月、麗江から西康（康定）までが1ヵ月ということである。こうしてみると、チベット方面への交通は比較的よかったということが判る。すなわち、チベット高原に出れば後は平坦な道が続くため、高山を幾つも超えねばならない西康方面よりもむしろ移動が楽だったのである。とはいえ、往復に約半年かかるため、冬季を避けて五月に出発して十二月に戻るというようになっていた。一方西康方面に向かう場合、通り道には毒草が多く、中毒を避けるためにも一日に半日分しか進めなかった。

#### (2) 交易品について

ではこの交易活動において流通していたのはどのような物品であったのか。まずチベット地区に輸出されたのを見てみると、茶葉、粉絲、麻糸、糖、皮製品、銅製品、阿片等があった。茶葉は沱茶といわれる碗形に圧縮したものであり、一包3.5斤で軽量かつ搬送に適している。これは大理の下関で仕入れていたという。革製品は藏靴と呼ばれるチベット族男性の愛用するブーツと、馬道具である。このことは、龍泉村で制作された革製品が馬幫によってチベット族地区に流通していたことを示している。銅製品は鍋などが中心で、白沙郷で作られたものである。阿片は下痢止めなどの薬剤として用いられたもので、阿片戦争後の1850年代から阿片の種を輸入して雲南での生産が始まり、麗江でも1930年代には生産されるようになっており、37年に禁止令が出されたにも関わらず、山間部で生産されていたという。

一方、チベットからの輸入品目は、布、毛糸、煙草、藏紅花、顔料、アルミ製品、藏青稞、延寿果（補薬）、魚口水などである。布はインド製で、ネパールを経由して入ってきたものである。毛糸は氂氈（ブル、pulü）と呼ばれるもので、ヤギの毛に木綿を少量混入させたものである。煙草はフランスおよびインド製であったという。藏紅花は薬草の一種で、目の病気、高血圧、婦人

の補血に用いられ、五月の清明節に飲む酒に入れることもあるという。アルミ製品は軽量であるため、小さなものから順に大きなものに入れてゆき、かさばらないようにして大量に運んだという。藏青稞も薬であり、咳止め、熱冷ましなどに用いられた。延寿果は草の根の一種であり、補薬として用いられ、煮て食べるものである。この延寿果は、上等の贈答品として珍重されたという。魚口水は白色の液体であり、痰をとる薬として用いられた。この薬は魚からとれる粘液状のものを原料としており、チベット人は信仰上の理由から魚を捕らない点を考慮すると、この薬はインド産で、チベットを経由して雲南に運び込まれたと考えられる。

以上のことから、麗江納西族の馬幫交易はチベットを経由して遠くインドまで延びており、国際的な交易網の中に置かれていたということが判る。

#### 四、馬幫の構成

以下においては、馬幫がどのような形態をとっていたかを整理してみる。まず、納西族の馬幫が用いていたのは正確には馬ではなく、「騾子」と呼ばれる馬とヤクの交配種で、納西族地区の特産である。気圧の低い山岳部にも耐えられる品種であるという。

先頭部を進む騾子は様々な特徴を持っている。その編成は一番目は牝、二番目は雄というようになり、これは陰陽関係に基づくものであるという。また牝の騾子は臆病で前方の危険をすぐ察知して立ちすくむため、馬幫全体が危険に遭遇するのを未然に防ぐことができるという実利的な効能も兼ね備えている。

この先頭の騾子は荷が軽いかわりに飾りを多く付けている。まず、両側に鈴がつけられ、これは「大鈴」及び「二鈴」と呼ばれる。これらの鈴は騾子が進むたびに音を出し、前方に馬幫の存在を知らせる。次に額に鏡を据え付ける。この鏡は赤い布にはめ込まれたもので、道教式の魔避けであるという。第三に、ヤクの尾を赤く塗ったものを前に掛ける。第四に緑や赤の旗を挿す。さらに銅鑼も付けられる。この銅鑼は狭くて見通しの悪い場所などで警鐘として打ち鳴らすものである。

馬幫の規模はそれぞれ異なるが、麗江大研鎮で馬幫を営んでいた頼氏の場合、最大200頭の馬幫を三班所有していたという。すなわち馬幫の適正規模は200頭前後であり、馬の数が増えると200頭ずつに分けて編成し直したのである。

馬幫の馬を世話する馬方は、一般に5頭につき1人が割り当てられる。ただしラサ方面に行く場合は路面状況が良いため、7～9頭に1人でよいとされる。馬方は誰がどの馬を管理するかが決まっており、またそれぞれが燃料集めや馬に食事をさせる草場探しなどの仕事を分担している。馬方は自分の担当する馬のしつけも請け負っており、雄馬は購入してすぐ、一歳馬のうちに去勢をしてしまう。この去勢は稲作の時期にやることになっており、その理由としてこの時期は気候がよく、去勢を施した後の炎症が起きにくいということが挙げられる。馬方は自分の担当する馬に名前を付けるが、それはその馬の毛色や背の高さによって付けられる簡単なものであるという。

馬幫には「馬世医」と呼ばれる馬の医者があり、彼らが馬の健康を管理した。馬世医になるに

は三通りの方法があり、すなわち先祖から伝承したもの、他の馬世医から教わってなるもの、さらには馬方自身が勉強してなるものである。馬世医は馬の食べる草の選定や病気の際の治療を行う。例えば、納西族の間では、馬が女性の経血の付いた草を食べると死んでしまうと言われており、馬世医はこれを治療するために女性の陰毛を焼いて灰にしたものを草に混入して食べさせる。こうすると馬は死を逃れるという。馬世医はこうした伝統的医療を通じて馬幫の健康を管理していたのである。

## 五、納西族の民俗における馬

さて、こうした馬幫活動と納西族の民俗はどのように関わってくるのであろうか。納西族の民族文化の重要な要素である『東巴経』には馬に関する記述が幾つか見られる。例えば、「馬の来歴」は後述する「超度」儀式において東巴が読む経の一部であるが、それによると馬は卵から産まれたとされる<sup>(3)</sup>。

納西族の葬儀儀礼において、最初の葬儀の三年後に再び「超度」儀式が行われる。この時、人々は人形とともに馬の形を模したものも作って祭る。納西族の間では死者は馬に乗って祖先のいるところへ帰ると考えられているのである。

また、『東巴経』の中にはある女性が葬式を行うくだりが述べられるが、そこで用意される品々は麗江の外から持ち込まれたものである<sup>(4)</sup>。その種類は様々で、まさに麗江には馬幫活動により様々な物資が流通していたことが判る。

## 六、馬幫活動の衰退と現状

民国期における麗江の馬幫活動の隆盛は、先に述べたように日中戦争という背景によって成り立っていた。したがって、戦争の終結はすぐさま交易活動の減退を引き起こした。援蒋ルート of 回復により麗江は再び内陸交易の主要ルートから離れ、また日本軍の撤退に伴い沿海地区の海上貿易が再開したことで、内陸交易そのものの重要性も低下したのである。さらに戦後のインフレが追い打ちをかけ、多くの馬幫が没落していった。

中華人民共和国成立後の一連の政策は、龍泉村で見られた皮匠から馬幫への結びつきを断ち切った。実は外地にいた皮匠や馬幫は完全に龍泉村から離れていたのではなく、自身の土地をまだ保有していて親戚などに管理させていたのである。ところが1953年に麗江で土地改革が実行される際、不在地主の土地は没収され、他の農民に譲渡される可能性が高かったため、彼らは急いで龍泉村に戻った。村人の話ではこの時百軒以上の世帯が村に戻ってきたそうである。そして1956年に農業集団化が実行されると農民の個人副業は禁ぜられ、皮匠は道具を捨ててしまった。そして1950年代以降の道路網の整備によって馬幫も次第に自動車交通にとって替わられたのである。今日馬幫は市場経済の下で、山間部と中心部の市場を結ぶ小規模なものとして機能している。

## おわりに

今回の調査では、現存する馬幫を調査したわけではないため、聞き取り調査で得た納西族馬幫に関する様々な事象を確認することはできなかった。また納西族馬幫の持つ民俗的特徴については、近接する白族、チベット族地域のそれとの比較が必要であろう。これは今後の課題である。

最後に、今回の龍泉村での聞き取り調査に協力していただいた李汝湘、楊沛成、楊鴻光の三名の老人には改めてお礼申し上げたい。

## 註

- (1) 参考文献④. 122ページ。
- (2) 参考文献⑨. 186ページ。
- (3) 参考文献⑩. 123ページ。
- (4) 参考文献⑩. 146ページ。

## ◎参考文献

- ① 王図瑞「雲南西北辺地状況記略」(『雲南邊地問題研究』上, 雲南省立昆華民衆教育館, 民国22年5月)
- ② 范義田「談談江邊古宗」(『雲南邊地問題研究』上, 雲南省立昆華民衆教育館, 民国22年5月)
- ③ 許鴻宝「麗江県大研鎮解放前の商業情况」(『納西族社会歴史調査』雲南民族出版社, 1983年)
- ④ 王明達・張錫祿『馬幫文化』(雲南人民出版社, 1993年4月)
- ⑤ 和志武「近代納西族の歴史発展」(『麗江文史資料』第七輯, 1989年6月)
- ⑥ 木枝連「抗日戦争時期麗江人民支前運送軍糧片断」(『麗江文史資料』第九輯, 1990年10月)
- ⑦ 袁基宏「抗戦中後期西南国際商道」(『麗江文史資料』第十一輯, 1992年10月)
- ⑧ 李瑞泉「麗江旅馬店」(『麗江文史資料』第十一輯, 1993年10月)
- ⑨ 解樂三「雲南馬幫運輸概況」(『雲南文史資料選輯』第九輯, 1989年5月)
- ⑩ 和志武編訳『納西族東巴經選訳』(雲南省社会科学院東巴文化研究室, 1983年4月)